



血友病治療の

.....  
今を語る

● Interview

東京医科大学 八王子医療センター

輸血部・臨床検査医学科 科長

田中朝志先生

「幅広い専門知識で、  
院内外の血友病診療を支援」





# 幅広い専門知識で、 院内外の血友病診療を支援。

血液疾患の専門医として、幼児から70代までの血友病患者さんの診療に携わっている東京医科大学八王子医療センター輸血部の田中朝志先生。診療方針をはじめ、院内連携の様子、さら

に地域中核病院としてのこれらの目標などについて、お話をうかがいました。

## 患者さんに合った テーラーメイドの 診療を

血友病診療において、小児科から成人の診療科へ移行するタイミングは、多くの施設で課題の一つです。東京医科大学八王子医療センターでは、高校への



東京医科大学 八王子医療センター

輸血部・臨床検査医学科 科長 田中朝志 先生

東京医科大学 八王子医療センターにおいて、血液疾患の専門医として、小児科をはじめ幅広い診療科と連携しながら血友病患者さんの診療にあたり、患者さんのご家族との関係づくりにも心を砕く。他施設の専門医とも連携しながら、多角的に患者さんをサポートしている。今後はコメディカルとのさらなるチーム強化を図るのが目標。

進学をきっかけに移行することが決まっています。輸血部の田中朝志先生は、「現在約10名の成人の血友病患者さんを診療しています。当施設では年齢によって診療科が分かれています。私が血液疾患の専門家ということもあり、幼児や小児の患者さんであっても必要に応じて診療支援をしています」と話します。そのため、幅広い年代の患者さんやその親御さんと直接話す機会があり、患者さんにとっては診療科を移行してまったく知らない主治医に代わるというストレスが少ないと言えます。

診療科が変わることで、患者さん自身の自立も促されます。血友病は基本的に先天性疾患であるため、ある程度の年齢になっても母親と一緒に来院する場合がほとんどですが、進学などで一人暮らしをする時が一つのきっかけとなり、自己管理も進んでいきます。田中先生は、患者さんの自己管理の状況把握に重



明るく広々とした施設内の待ち合いスペース。



他にも田中先生が留意しているのは、血友病という病気そのものや製剤について、患者さんに正しい情報を提供することです。特に今は製剤の選択肢が増えたため、それぞれの特徴を伝えるようにしています。個別化医療の一環で、患者さんの希望も聞きながら、できるだけその方の希望や状況に合う治療をしたいという考えから、出血のコントロールがうまくいかない場合や、ライフスタイルの変化に合わない場合などは、先生から製剤の提案をすることも多いと言います。

また八王子という地域性から、転院の患者さんも少なくないとしながら、「転院してこれた患者さんは、最初に止血法などをしっかり確認します。例えば診療を始めた当初、輸注記録で1か月に2、3回も出血されていることがわかり、投与量を確認したところその方の体重に対して投与量が少なかったというケースがありました。個人に

よって最適な治療は異なるはずなので、一人ひとりに合った診療を心がけています」と田中先生。患者さんをきめ細かく診療し、テーラーメイドの治療を進めています。

### 診療科を超えた サポートで、 包括ケアもさらに充実

当院での院内連携について田中先生は、小児科の場合、必要に応じて診療支援を行っていることに加え、血友病に関する質問や相談も受け付け、血液凝固についての幅広い専門知識で診療科を超えたサポートをしています。「実際に血友病患者さんを診ておられる小児科の先生は、もう少し踏み込んで勉強したい、深い知識を身に付けたいとおっしゃいます。そういう先生には、勉強会や講演会、学会のセミナーなどを紹介しています」。

また整形外科や歯科口腔外科

の場合、手術が必要な血友病患者さんに対して、田中先生が止血コントロールや注射の指示を行います。そして手術などの処置は各外科の医師が担当するという役割分担にすることで、外科の先生も安心して手術に臨まれると言います。



血友病患者さんが抱える合併症について、慎重に経過を診ていく必要があるという田中先生。「血友病の知識や診療経験がある他施設の医師とも連携し、患者さんにとってベストな治療を行っています」。



一方で田中先生は、これらの診療科の先生方にも血友病についてより良く知っていただけるよう、さらにコミュニケーションを図っていきたいと語ります。「例えば関節症の場合、一般的に高齢の患者さんが多いと思うのですが、血友病患者さんのケースとは少し異なると思っています」。





血友病患者さんは若い頃から少しずつ関節の状態が悪化して、中には40～50代で手術をする方もいらっしゃると思います。そのため長い目で状態を確認する必要があります。あるのです。担当医が変わっても記録は残っている、初診時・5年前・10年前などの状態と比較して、本当に状態が悪化が進んでいないか診ていただく取り組みは必要だと感じています。また歯科口腔外科の場合も同様で、特に高齢の血友病患者さんの歯の状態は決して良くありません。それは、強くブラッシングすると出血するので、怖くてケアができなかったためです。このように、関連する診療科では、血友病の病態を踏まえた最適な経過観察が望ましいと考えており、田中先生は診療科を超えて積極的に情報提供をしていきたいと考えています。

そして今後は、看護師やリハビリテーションの理学療法士といったコメディカルとの連携強



田中先生は、「血友病患者さんの状況をさらに詳しく知り治療に生かすためにも、看護師をはじめコメディカルとの連携をさらに強化していきたい」と語ります。



化も目標です。血友病に興味を持つ看護師もおり、将来的には血友病ナースなどの資格ができ、専門的な知識を持ったスタッフが増えてくれることを期待しています。

## 血液疾患の専門医として、さらに積極的な地域診療を目指す

一方他施設との協力について、当施設では、東京医科大学の本

院や荻窪病院と密に連携しています。日ごろは決まった病院で診療を受けている患者さんでも、急な出血の際などは当施設で処置を受けることもあります。

また東京医科大学八王子医療センターは、血友病診療の地域中核病院でもあります。「現在のこの多摩地区では、血液凝固の専門家は私だけです。急なトラブルはもちろん、例えば後天性血友病などの場合も、専門知識に加えて製剤もなくては対応でき

ません。困った時には、相談に乗ったり受け入れることもできますので、ぜひ声をかけていただきたいですね」と田中先生。地域の血友病患者さんに、近くで安心して診療を受けてもらえるよう、これからも院内外を問わず広く医療者にアピールしていきたいと語ってくださいました。

## 患者さん指導に役立つ各種パンフレット。

バイエル薬品株式会社では、患者さん向けの指導パンフレットをはじめ、ご家族や学校の先生に、血友病について知っていただくためのさまざまなパンフレットをご用意しています。詳しくは弊社医薬情報担当者までお気軽にお問い合わせください。

